

家庭に於ける趣味涵養

川口孫次郎

第五節 年中行事

イ 定期の行事

紀元節、地久節、天長節などが今少しく家庭内に於て祝賀せられ得る工夫をしたいためのである。春秋に於ける招魂祭も一般に家庭に於ても祭らるゝやうにしたいものである。

従前行はれたりし、元旦、七種鏡開、節分、初午、涅槃、上巳、春分、灌佛、端午、星祭、靈祭、蟲干、八朔、重陽、秋分、爐開、玄猪、煤拂、除夜などの行事の如き、背て舊制破壊熱の盛なりし時代には一も二もなく罵倒せられた者であつたが、されどそは一種の反動の結果にして、公平に穏やかに考ふれば、此等行事も一朝一夕の成立に非ずして夫々に由來がある、或ものは心氣を新にし、美の指導となり武の奨励となり、謝恩の教訓となり、或ものは宗敎心の培養となり、健康の祝賀となり、將來に希

望をかけて過去の追懐となり、以て理屈以外にさまゝの趣味の涵養となるものである。

其他、祖先考妣の祭なども、遠を追うて延いて以て民の徳を厚きに歸せしめんとするやうな政治道徳の要求のみからではなくて、穩健な敬虔深き趣味を涵養して、大局より見たる道徳教訓にもなるであらう。

苦難奮闘の記念日或は家族の誕生日などを記念することも、將來に向上し精進しつゝある者に穩健なる慰藉と奨励とを與ふることにもなるであらう。

ロ 常時の行事

○動物との近づき
家庭に於ける趣味涵養の一方法として、家畜を飼養することもよい。小犬や猫や鶏や山羊や牛や馬などを飼つておくことは、夫れゝ實用の目的

ある外に利用すべき機会が頗る多い。
或は養蠶をしたり養蜂をしたり養魚をしたりすることも亦其實益ある外に涵養上に利用が出来る。或は膝にこぼした飯粒を背戸の物干臺の上に載せ

て昵懇の雀に響應させたり、素麵を箸にするに當りては先づ其二三條を泉水の錦魚に裾分させたり臺所に茄子の萼が切りはづされなれば、鈴虫に甜爪の端が出来たならばキリ／＼スに進上させたりすること出来やう。

由來、彼の犬を打つたり、猫を引張つたり、鶏を泣かしたり、蟬を千切つたり、蜻蛉を揉んだりするのは、適切に彼等腕白をして此可憐の動物どもに接近せしめないからである、若し其方宜しきを得て交際せしむれば、大人も企て及ばぬ同情を動物どもに及ぼすやうになつて來て無限の趣味を夫自身に感ずるやうになるであらう。動物虐待防止止會の企もよろしいが、動物に接近懇親會の計畫が尙ほ一層必要であらうと思ふ。其手始が家庭である。

○植物との近づき

之は前者よりも一層簡易に出来る。無論植物にも觀賞用のものと實用を兼ねたものがあるが園藝などに採用するものは必ずしも彼の薔薇とか菖蒲とか百合とか菫菜とか菊とか朝顔とかいふや

うなものに限つたわけでない。今少し手近い豆なり芋なり瓜なり茄子なり大根なり小松菜なりでも其形容色彩並に成長の工合なりにワザとならず注意を向けしむれば、趣味の涵養上無限の資料を得るであらう。

動物の如くに其場所を移動せぬ爲、幼兒の趣味を動かすことは比較的に少いだらう。併し之も其周圍に居る者其の心懸け如何に依つて面白く近づくことも出来るであらう。假令ば桃を食べる、栗を貰ふ、柿が生る、梅を買つたなどいふ時には其一顆を割愛せしむる、否その種を放置せんとする際に心して後始末をさせる、約言すれば、場所を定めて植付けさせる植付けた當人が殆んど忘れて終ひかけた頃に種が割れてさゝやかな嫩芽が萌えて來る、雑草の取り除きやら、如露で半杓の水を灌かせるやら、それとはなしに働かして居る中に其嫩芽の成長の勢などに心が向いて來る。且暮に自づと足が向いて來る。

彼等幼者には立派な鉢も盆も必要ない。又與へても大人の賞翫するほど有難く思はない。彼等に

は土瓶の壞れ、碗の缺け、罐詰の殻、明瓶、螺、螺、竹筒でも却て満足して居る。或見地からは幼児は全くの茶人である。それで雑草の盆栽や鉢植の立派なのが出来て嘗人ども恐悦至極に思つて居る。こんな罪ない遊戯から娛樂から頓てふりかへりみて、

桃栗三年柿八年、梅は酸いとして十二年(俚諺)

成程、此桃此栗は三年前に自身が種で蒔いたものであつたが今年はその花咲いて實が生つたか、といふ境遇に立つことになると、其處に自然の趣味が自づと沸いて来る。斯ういふ調子に向いて來れば植物との親しきは動物とのそれよりは一層清新の趣味があるやうである。動物については趣味の涵養上説明することの好ましくないところもあるが、植物の方は其習性形容などが人間のそれ等と一層懸け隔つて居る丈に、罪がなくて而も想像を自由に働かす餘地が多くてよい。

山で伐る木は數多けれど

近頃、學校の講義位で美だの趣味だの聽き嚙つた

者の中に、小才の利く小理屈の立つ者などは、緑、滴る林の前に立つて此俚諺を想ひ出して、切理想の美と認めて伐る木は求むれどあるやうでないものだ、といつて居る。が天然に親しみ草木の生長などに心よせし者ども眼には並み立てる一樹一株としてアダに生ひ立ちしものがなく、幾歲月の間、自然の恩恵の下に數多の辛苦を凌ぎて以て今日に至りしものなることが殆んど直覺的に映するが故に、數多き木立の中に何れを見ても之と指して伐るには惜しくて刃を揮ふ氣になれないところから、思ひ伐る氣は更にないと嗟嘆して居る、此優懷の源泉は主として家庭時代から涵養せられたものである。

若し此襟懷が養はれ来るならば、殊更に好んで薔薇を挿したり莖菜をかざして、無用の時にもハイカルやうなこともなからうし、櫻狩りや紅葉狩りに必ず折つてかざさずば物足らぬやうな未熟な願ひも起るまじく、況してや路の辻の蒲公英を無造作に下駄に踏みたくことも、他人の垣根の紫雲英を横薙にステッキにかくることもなくなるで

あらう。

健全な愛護の心が涵養せらるれば、彼の理屈家のいふ、観察力も養はれ、智識の開発にもならずし其確實をも増すだらうし、世話する爲に進んで勤勞に従事する習慣をも養へる、少くとも氣輕く起つて愉快に仕事をすする氣風をつくれやう、繁忙の中にも胸中自づから閑日月も出来やうし、以て品性の陶冶を資することにもならうし、おまけに代呂物によりては直に相應に實用に立ち収入になるものもあらう。

ハ 臨時の行樂

家庭の仕事には何時が閑暇といつて勤勞の時間に精密に區劃を立てられないのが普通である。平たくいへば年が年中仕事である。必ずしも學校の生徒のいふやうな能く勉め能く遊べとか、八時間は眠つて八時間は勉めて餘の八時間は遊ぶといふやうな、羊羹に尺を當て、切つたやうには行かないのが常である。其あまりに規律のやかましくない大規律の下の割合に融通の利くところ、桃源郷たり真の家庭たる所以であらう。されば餘人は暫

くいはず、少くとも主婦たらむ人は、年が年中何呉れと忙はしい、其忙しい仕事を一生懸命に着々仕上げて行くのが樂みであると感ずるやうに修養を仕上ぐる事が、何より大切である。

右の覺悟がしつかりついで、落付いて見れば、家庭の仕事が唯大體の規律の下に精細な規律を立て抜けないところに却つて面白味もあつて、工夫と手廻しとをすれば、随分餘裕をつくれぬこととはあるまい。少くとも胸中には綽々餘裕が出来やう。平素其本務に一生懸命に奮勵しながら、此餘裕が胸中にあるならば、少閑に、籬の山茶花にも僅にも自適することも出来やう。半間の窓からでも奇峰崢嶸の夏雲に自適することは出来やう。夕顔棚の下にも納涼が十分に出来、椽邊に起つても觀月が遺憾なく出来、臺所からでも雪見が残りなく出来るであらう。此等の觀賞自適を取て直に健康なる趣味とはいはぬが斯ういふ心懸けが健全なる趣味の出發點であることを敢て斷言する、涵養したきは此種の源泉的のものである。右のやうに趣味の源泉が出来て居つて、年中夙

夜間断なく而も常人の眼には變化に乏しかりさう
な其實重大な任務なる内政一切を一身に引受けて
家族一同の幸福の源泉たるべく家居にのみ執筆盡
瘁しつゝある主婦に對して、家長たり家族たるも
のどもが、

草摘み、蕨摘み、櫻狩、汐干狩、蕘狩、紅葉狩、
など隨時に舉家散策する工夫をすることは、露程
も慰藉慰勞を求むる念なき主婦に報ゆる趣味ある
一方法であらう、主婦に報ゆるが即ち家族各自自
身の慰藉たり幸福たるものであらう。

二 曆の事

以上の諸項を大體の表に編製して、家庭曆とで
もいふべきものを定めてかくことも面白からうと
思へるが、更に一般に便利にして且つ効力の多か
るべく思はるゝのが、普通の曆の編纂に手加減を
加へることであらう。時日には變りはあるべくも
わらぬことは勿論なれど、彼の貳十四氣七十二候
の如き折節の移り變りにつれて天然人事の消息の
一二行を入れかくことは、趣味の涵養上輕からぬ
必要なことであらう。此點は昔のよりは今の曆に

一層缺けて居る、語を強めていへば此點丈では曆
は退歩を示して居る。

▲活動的の人と靜的の人(大隈伯書) 活動的方面
の人には靜思的冥想が大なる修養になる、靜思的方面の人
には活動的事業が大なる修養になる、活動的の人と靜的の人
も時の反對の修養を心掛けるが好い、兩面互に融合緩和
して始めて高潔偉大なるものとなる、又事業を行はんとす
るに當つては二種の反對した思想が起つてくる、一は善事
として行はんとする思想、一は名利を得んとするの思想
ある、名利の念が起きたら此の動機を一轉せよ、始めは心
中には一種の苦惱を感ずるが、打ち勝ち一轉せよ、始めは心
中には人道の點から行動し得るやうになる(活動的の友)

▲何が一番六づかしいか(全) 普通教育の知育体
育徳育の中で何が一番易いか、知識を與へることが一番易
い、其次は健康である、併し學校卒業の方で、五ヶ年皆
勤の方は何百人の中値に何人しか知らない所を見ると、体育は
知育よりも餘程六づかしいが知らんと我輩は思ふ、全体人
間の精神が充分に活動する時には病氣は起らぬ、我輩の長
壽法も精神が支配すると云ふ主義である、徳育は体育より
は更らに六づかしい(京華校友會雜誌)